

【参考資料】

(タイトル)

市町データヘルス計画支援事業(高血圧分析)
— 一県、市町、静岡社会健康医学大学院大学で協働した取組 —

(要旨)

今年度、国民健康保険課では、県民の高血圧予防に資するため、市町、大学及び県の実務者からなるワーキンググループを立ち上げ、市町の保健師や管理栄養士が日々の保健活動で感じている課題や疑問を SKDB (静岡県の国保データベース) を用いて分析し、その結果を保健事業に活かすための方策を検討した。

現場が抱えている課題や疑問を大規模データを用いて解決することで、保健活動を最適化するための科学的根拠を得るとともに、現場の担当者がデータを活用・分析し、分析結果を読み解き、結果に基づいた適切な保健活動を社会で実践・実装するための力を養った。

(内容)

1 検証の進め方

参加希望のあった 11 市町と県 (健康局 3 課、健康福祉センター) の保健師、管理栄養士による第 1 回ワーキングを 9 月 20 日に開催した。現場の疑問や課題を抽出した後、SKDB で検証可能なテーマに集約してから分析を行い、得られた結果の解釈や保健事業への展開について第 2 回、第 3 回ワーキングで検討した。

2 分析結果の主なポイント

市町の保健師や管理栄養士が立てた仮説について SKDB を用いて分析した結果、次の知見を得た。

(1) 高血圧対策の必要性

- ・ 高血圧ではない高値血圧 (収縮期血圧 140 未満) や正常高値血圧 (同 130 未満) であっても、正常血圧 (同 120 mmHg 未満) に比べると脳卒中の発症リスクがそれぞれ 1.85 倍、1.26 倍高まる。**高血圧対策のポピュレーションアプローチにおいては、非高血圧者も念頭においた対策が望ましい。**

(2) 非肥満者に対する高血圧対策の必要性

- ・ 現在のメタボリックシンドロームに焦点をあてた特定健診では、非肥満ハイリスク者が保健指導の対象から除外される。非肥満であっても、高血圧であれば脳卒中の発症リスクが 1.88 倍、糖尿病であれば 1.85 倍高まる。
- ・ 特定保健指導では、**腹囲基準に該当しないハイリスク者を見落とさないように配慮することが望ましい。**

(3) 脳卒中発症のリスク因子

- ・ 高血圧と糖尿病は脳卒中のリスク因子であるが、両者が併存した場合、脳卒中に対するリスク度が相加的(※)に高まる (高血圧のみでは 2.01 倍、糖尿病のみでは

1.74 倍だが、糖尿病と高血圧がともにあると 2.80 倍)。高血圧と糖尿病の合併例はハイリスクアプローチの対象として考慮すべき集団である。

- ・脳卒中のリスク度が高い者を見極める上で、過去の健診データは重要な情報源となる。直近の健診で血圧が高く過去の健診でも血圧が高い場合は、脳卒中の発症リスクが最も高く、ハイリスクアプローチの最優先候補となる。

※ 相加的 2つ以上のリスク因子が重複している場合、それらの影響が足し算で現れること。

(4)飲酒・肥満と血圧、脳卒中との関連

- ・飲酒は高血圧、高血圧に対しては、1合であってもリスク因子となる。肥満も血圧と強く関連することから、多量飲酒、肥満、並びにそれらを重複して有するケースについては優先的に対策を考えるべき部分集団である。

(5)いきなり寝たきり

- ・介護保険の初回認定が要介護5(日常生活のほぼすべてに介助が必要)であった場合を「いきなり寝たきり」とすると、2013～2017年度の該当者は6,759人であった。このうち、原因疾患が脳卒中と推定されるケースは8.6%であった。介護認定2年前を基準とした場合、認定後1年間の医療・介護コストは6倍に増加していた。脳卒中の予防は、個人のQOLを維持し医療費を抑制する上で重要である。

3 今後の展開

(1)市町の展開

- ・今回の取組を通じて得た知見を、市町でハイリスクアプローチやポピュレーションアプローチの方針策定に活用する。
- ・保健指導対象者に適切な情報を提示することで、生活習慣の改善などの行動変容を促すきっかけとする。
- ・令和5年度に策定するデータヘルス計画、健康増進計画に活用する。
- ・今回の取組に参加していない24市町に対しては、研修会(1/24実施済み)や成果報告書を通じて情報を提供し、活用してもらう。

(2)県の展開

- ・令和5年度国保ヘルスアップ支援事業の高血圧等分析情報活用事業を通じて、今回の分析結果のポイントを県民に広く周知していく。

(3)大学院大学との関わり

- ・今回の取組を通じて、市町と大学院大学との交流が図られた。引き続き、データの扱い方や分析の方法、分析結果の正しい解釈の方法などについての研修会や、エビデンスに基づいた行政施策の立案と社会実装、効果評価などについて、静岡社会健康医学大学院大学のサポートを受けていく。